



第69号
平成19年(2007)
10月17日発行
(年4回発行)

時代の風

青木秀樹

今年の夏はいかにも猛暑という言葉にふさわしい暑さだった。日本の最高気温が更新されたことは喜ばしいことなのかどうか、地球の温暖化が急速に進んでいることを実感させられた。

この八月、作詞家阿久悠氏が亡くなった。昭和十二年二月七日生まれ、享年七十であった。阿久悠氏は時代の風を読み、時代の風を生み出す作詞家と言われた。そのことは多くの日本人に愛されたヒット曲の多さが示している。「また逢う日まで」(尾崎紀世彦)

「あの鐘を鳴らすのはあなた」(和田アキ子)
「どうにもとまらない」(山本リンダ)
「せんせい」(森昌子)「五番街のマリーへ」
(ペドロ&カプリシャス)「宇宙戦艦ヤマト」
(ささきいさお)「北の宿から」(都はるみ)
「青春時代」(森田公一とトップギャラン)

「津軽海峡・冬景色」(石川さゆり)「UFO」(ピンクレディー)「舟歌」(八代亜紀)
「もしもピアノが弾けたなら」(西田敏行)
「時代おくれ」(河島英五)などあげたら切りがない。

阿久氏は小説も書きエッセイも書いたが、氏は『昭和おもちゃ箱』(知恵の森文庫)のあとがきにつきのように書いている。「時代を知るために、時代の欠伸や時代の徒花と云われかねない種類の小物を検証する。ぼくはエッセイはもちろん、小説を書く時も、歌を作る時も、小物を書きながら壮大な時代を証明することをやっているつもりである。

その阿久氏の創作の源泉になったのが、毎日つけている「日記」であった。この日記は私的身辺雑記としての普通の日記とはかなり異なり、その日一日にいくらかでも自分の興味をひいたものを何でも書き記すという日記である。部屋中のあちこちに置いてあるメモ用紙に書きなぐったものを集めて、深夜二時に一人編集会議で整理して記入する。その定番となつているのは世界情勢のあれこれ、いかにも時代を感じさせる社会ネタ、主なスポーツの結果など。それを為替で稼ぐ気もないのに円・ドルのレート、株を買ったこともないのに平均株価を記すのはこの二つが現代の日本に吹く風そのものだと言う理由である。そのような外在型の情報は黒字で書く。さらにそれらに加えて「その日に思いついたヒン

トとかアイデアとかプランとか、具体的には詩のタイトルであったり、小説のモチーフであったり、時には、言葉そのもの」など内なる作業を赤字で書く。前者と後者の割合は六・四あるいは七・三になるように選んで、ページに形よくレイアウトして書き上げる。自分の感性というフィルターで捉えた「この日世界で何があつたか」を何度でも読み返すことが創作の源泉になつたようだ。

東明雅先生はいつも「連句は世態人情諷交詩」と言われ、「客観写生」の俳句との違いを強調された。芭蕉とその門人は彼らの生きた時代の連句を巻いた。蕪村もまた同じである。それらの時代と現代とは社会の仕組み、生活の仕方、価値観など大いに様変わりしている。にもかかわらず、芭蕉・蕪村の作品に現代人に理解・共感できる発句や付け合いがいかにも多いことは驚くべきことである。

連句は時間的にも空間的にも自由に移動できる特性があり、その変化を楽しむことができる。芭蕉の心法を学び、蕉風の連句の技法を身につけることは重要なことであるが、その時代の句柄までまねることはない。現代の連句はその基本にあるのは現代人であり、現代人の感性で創作されるべきものである。

将来において理解される「新しさ」を時代の風として捉えることが現代の連句人に求められているのではないかと思う。

その意味で阿久悠氏に学ぶことが多いのではないだろうか。

昭和初期、高浜虚子によって唱えられた花鳥諷諭論は、爾後ホトトギス派の俳句の根本理念となり、また、これに対抗する新興俳句運動を引き起こす契機ともなり、相俟って今日の俳句全盛時代を招来した。

花鳥諷諭とは、「花鳥諷諭と申しますのは花鳥風月を諷諭するという事で、一層細密に言えば、春夏秋冬四時の移り変りに依って起る自然界の現象、並びにそれを伴ふ人事界の現象を諷諭するの謂であります」（一虚子句集「自序」と虚子自身が言っている通り、その中に人事界の諸現象も含んでいるのであるけれども、それはあく迄四時の移り変わりによっておこるもので、主体は自然界の現象であり、月・雪・花その他、自然の風物を詠むという事であり、この詠み方の背後に写生説がある事も周知の通りである。

右に倣って私は現代連句の根本理念を考えたいのであるが、これには芭蕉の俳諧における根本理念を再吟味することから入るのが捷徑であろう。私が正岡子規の連俳非文学論を読んで納得出来なかつたのは、その前に、芭蕉の俳諧、ことに「冬の日」・「猿蓑」・「炭俵」の名作を数々読み、感動していたからで、このような作品をもつ俳諧が、どうし

て文学であり得ないのか、私は未だに分らないのである。

ここでは「猿蓑」の中の「市中は」の巻を取りあげ、その根本理念を探ってみよう。

ご承知の通り、この作品は発句以下、市中の雑踏から田園へ、そして山間僻地へと情景が推移し、その中に市民・農民・旅人など、さまざまな生活が描かれている。裏に入ると柔媚な恋の句と暗鬱な述懐の句が交錯し、変化に富んだ人世の種々相が描かれる。名残の表になると、小市民の貧しい生活の相が続くが、折端近くになって、隠者の風狂の生活に変わり、名残の裏の王朝古典の世界に続いて有名な「浮世の果は皆小町なり」の絶唱となる。三十六句の中、純粹な自然描写もないではないが、それは四、五句に過ぎず、それらも、前句の会釈、あるいは通句に用いられる場合が多い。

このように、俳諧は叙景より抒情が中心で、さまざまな庶民の実体を描いているが、また、末摘花・西行・小町などを面影にした句もあって、要するに人の世の虚実を連衆が詠みあい、付け合っているものである。

「芭蕉翁附合集評註」という本の中で、左野石分が「すべて俳諧は第一人情世態にわたらざれば、あはれなる事をかき事をいひ出づる事かたし」と言っているが、その通り、

俳諧とは人生の虚実（世態・人情）にあはれとをかしを見出して詠み、その句にまた付句をし合うものである。俳諧は発句を除けばあとはみな付句である。その付句はみな人世の虚実を描くのであるから、写生だけでは間にあわず、想像力あるいは創作力を重視しなければならぬのは当然であろう。虚実の論はすでに談林俳諧の時代から登場し、蕉風俳諧にも継承され、発展した。これを体系化したのが各務支考で、表現における虚の尊重を説いている。

私は俳諧の根本理念を右のように考え、「世態人情諷交詩」とした。あるいは「人世の虚実諷交詩」と言ってもよい。

そして、この理念は芭蕉の俳諧の伝統をうけている現代連句の根本理念としても、過不足のないものと考ええる。

冒頭にも述べたように、花鳥諷諭論の提唱及びそれに対抗する新興俳句の勃興が、現代俳句を隆昌に導いたように、私の「世態人情諷交詩」論が、現代連句界に一石を投ずる事になれば幸いである。

猫養同人会作品

平成十九年六月十七日直尾
於 新宿ワシントンホテル

歌仙 「生の棧」
坂本孝子 捌

欲望は生の棧ほととぎす 孝子
 教盛草の咲いてゐる山 恭子
 バスケント焼き立てパンを自転車に 靖子
 図書館に寄り返すCD 啓子
 十六夜の高階の玻璃ひろびろと 淳子
 客のくゆらすパイプ爽やか 守男
 秋の雛目尻に紅をほどこして 恭
 遊ばせ言葉変身の果 男
 上海の租界の恋は酒と金 淳
 先の尖ったOLの靴 恭
 救急車タクシー代りに呼ばれけり 靖
 月光蒼き植込みの雪 啓
 無言館出て二三言息白く 啓
 憲法九条死守の構へで 恭
 夢をかけメジャーリーグのマウンドに 啓
 ハンバーガーにポテトたっぷり 啓
 下町の川から海へ花筏 恭
 お隣の児の歩きだす春 淳
 ナオ遷宮の来年こそは伊勢参り 男
 素人寄席に上がる提灯 恭
 晩節の背筋を伸ばす盲編 靖
 手の窪に受く葉いろいろ 淳
 大西日隊商宿の水甕に 男
 クサリ蛇ゆく跡の波形 恭

玉鋼磁石引きずり蒐めけり 男
 さても恐きは奥方の勘 淳
 鷹匠の殊に女人の香を忌みて 同
 砂糖も入れぬうすい珈琲 啓
 追ひかける快速列車昼の月 靖
 運動会にこけた遠き日 男
 ナリうそ寒の猫探しをり老教授 孝
 ぬりえブックの復刻が売れ 靖
 折々はタウン誌などに目を通し 同
 孫の手代りに使ふ物差 淳
 みほとけの花の大和は母の郷 孝
 鯉諸子の鮎炊きの艶 淳
 連衆 式田恭子 関口靖子 小池啓子 淳
 上月淳子 近藤守男 淳

歌仙 「前方後円墳」
副島久美子 捌

郭公の鳴くかた前方後円墳 久美子
 梅雨の晴間を吹き抜ける風 要子
 学童のモビール教室染しげに 千恵子
 だぶだぶズボンちよつとずらして 良子
 十六夜携帯電話の道案内 かりん
 ひともと立てる葉鶏頭あり ゆみを
 地芝居の幟旗上げ村興し 良
 付け文潜む重箱の底 同
 ジュブゼイムジュテイムの差を嗅ぎ分ける 良
 素知らぬ振りの膝の飼猫 良

はしか流行忘れた頃にやって来た 千
 やつぱり二階からの目薬 千
 月光に氷柱の長さ確かめて 千
 コラボレーション冬の声明 要
 山の奥そのまた奥も山の脈 同
 水分補給いつも絶やさず 同
 手を打てば花筏分け池の鯉 要
 かたびら雪の時に落ちくる 千
 ナオ染卵セロハンの色とりどりに 千
 出島通詞の血を引きし友 良
 髭面の世界を股に駆け巡り 良
 昨日の敵けふの同胞 良
 縁側ではしり蚕豆ビール酌む 千
 初虫見る叢の中 良
 縫ひかけの千人針の赤い糸 良
 無言館には泛ぶ裸婦像 良
 夢なれば思ふ存分抱きしめ 良
 こけし集めのやめられぬ癖 良
 羽州への旅に遊びて月まどか 良
 N極いつも北をやや寒 良
 ナリむくほどに香り漂ふ青蜜柑 要
 フェアリー買って乗らないで置く 要
 裏口も盗難よけの補助錠を 要
 運命線は縦にしっかり 良
 老士日課の散歩花堤 久
 ペンキ塗りたて揺れるふらここ 千
 連衆 山本要子 鈴木千恵子 本屋良子
 登坂かりん 青島ゆみを

歌仙 「葛蒲園」

東 郁子 捌

好日や真盛りに遭ふ葛蒲園

絵筆走らす夏帽の人

パンを焼く香ほのかに漂ひて

トイブードルの愛らしき貌(かほ)

穏かな立居振舞月の客

べい独楽競ふ兄と弟

秋深くネービーブルーの海眩し

指切りしたからきつと来る筈

ときめきて第二の青春はじまりぬ

天気予報は曇のち晴

明治から弱腰外交続きをり

白洲次郎の足跡を追ふ

遠火事を美しと見る不人情

クレーン伸びて寒月の下

眠さうな車掌交替山の駅

濃い珈琲をなみなみと注ぐ

留学生連れて飛鳥の花を見に

春泥さらふ遺跡発掘

ナオ恙なく同い年なる雛納む

予防注射を避けし災難

よく笑ふ友は洗礼名ヨハネ

ベネチアの市仮面買ひたり

ひまはりの畑地の果まで続き

こんな処になんと御器嘯

君のため還暦過ぎて免許取り

言葉の壁は愛で補ふ

呑むほどにお国自慢の唄が出て

解散近く廻る選挙区

満月は格差社会を照しをり

雁の一团組める編隊

ナリ豊作の道の仏に掌を合せ

分教場は生徒減りたる

あれこれと野球少年大き夢

やさしい哲学ベストセラーに

花の宴うからやからも打ち揃ひ

乗込鮎で祝ふ上棟

連衆 松原弘子 青木秀樹 中村ふみ

中林あや

歌仙 「木戸の鈴」 矢崎 藍 捌

三十年前關口芭蕉庵に初めてうかがひしこと

木戸の鈴涼しく鳴れり師なりけり 藍

凜ととほりし若竹の声 美奈子

梅雨晴れ間高層ビルは伸びをして 洋子

積んどく本の崩れたる月 好敏

禁煙の灰皿眺めるかまどうま 美代子

願ひ叶ひて地芝居の役 奈

観音堂修復の寄付順調に 洋

ぼくらのKISSを誰も見てない 藍

星の夜の胎児は三度微笑んで 洋

暗紅色のワイン滴る 藍

吐魯番行き横断鉄道長々と

偽もの時計汗ばんでをり

年金の消ゆる首相の美しき国

河豚鮫鱈は鍋の横綱

酉の市月とおかめを肩にのせ

孫も曾孫もみんな集合

懐かしきサザエさんちのお花見は

でーでーぼーぼー土鳩長閑に

ナオ捨て馬券難流しに流さるる

巷ではやる淋巴体操

足音で生業当てる名探偵

タブロイドにはプロンドの女

雪暗れの枕涙と嘘まみれ

しづかにたたむ白鳥の羽

酸味より苦みの珈琲いかがです

フーガばかりがかかるCD

戦さ熄まぬガザに祈りし砂の民

秋の薔薇を墓に一輪

月まどか祖母は句帖にかきとめて

銀杏炒って盛りし食卓

ナリ山間の秘湯を尋むるバスツアー

ご利益のある天狗お守り

与太郎がやつと取りたる医師免許

つい足の向く寄席漸なり

花片のほろろ幸せ掌にほろろ

ふらこ揺らす姉妹よく似て

連衆 鈴木美奈子 大島洋子 豊田好敏
山田美代子

歌仙 「師の声の」 橋 文子 捌

師の声のまだ耳にあり竹植うる

いらむしの繭付きし大石

設計図入力データ山積み

拇印を捺して貰ふ書留

おもたせの刺身嬉しく月の客

豊作の田の見回りを終へ

点となり尾越しの鴨は峰に消ゆ

手話に似てゐるフラの振り付け

初会にて恋のワンツーパーンチ決め

ひそめし科白揺する琴線

番長は麻疹免疫ないらしく

掛け持ち教授けふも休講

駿河台ガラスタワーに冴ゆる月

毀誉褒貶に寒々として

年金も介護保険も覚束無

四方八方走る韋駄天

共寝にもふと夢醒めて花明り

懐剣抱くぬき柔肌

ナオ少しだけ大人の世界遠霞

紙飛行機を思ひ切り投げ

絶海の孤島に独り詩を吟じ

赤目の兎所在無げなり

糞掃衣まとひてもなほ般若湯

雑巾がけのダイエツトする

バラソルをくるくる回す御寮人さん

香水ぶつと僕にひと吹き

義 ア 同 紗 義 ア 義 ア 紗 義 紗 ア 紗 ア 文 ア 同 義 ア 紗 ア 義

紙め尽す毒と知りつつ皿までも

誰の卸か階段の隅

突つ立って月を見てゐるお化け共

注文の来る猿の腰掛

ナウヴェトナム便待つ香港のそぞろ寒

株も為替も乱高下して

さあとといふ叫びは卓球少女から

何々王子あちらこちらに

絵付けする陶の工房花の屋

春を惜しまむミサソレニムス※

※ミサソレニムス||ベートーベン作曲のミサ曲

連衆 根津美紗 生田日常義 松島アンズ

競ひ立つバベルの塔も入梅かな

街に溢るる紫陽花の藍

ひらひらと流行のまた変はるらん

しつかり結ぶもめん風呂敷

外つ国の土産話に月も笑む

克蘭ベリーのクツキーでお茶

盆波が群れて寄せ来て崩れ落つ

動く見えぬ沖の油槽船

リーダー綱くぐり届きし甘い文

夫背伸びして愛を囁く

はるばるとY染色体の長い旅

美恵 路子 了齋 蓉子 英子 齋 同 路 同 齋 英 蓉

雪の列車で着いたラーゲリ

西方の夜毎に細る冬の月

横綱めざし多食早喰ひ

穂本をカメモトと読む年金課

ちよつと手を出す投資信託

裏山は人に知られぬ花盛り

もの思ひつつ囁の中

ナオ塩水に浮ぶ糍は抄ひ捨て

ギャロップで行けメリーウイドウ

オペラ座を沸かす男の飛び六方

浮世絵作者謎解けぬまま

羅を透かし肌のなほ白し

神の子ですと頑と言ひ張る

新宿の分別ゴミのモデル地区

隙間みつけて鳴る虎落笛

売り惜しみ鮓のえんがわそつと煮て

高血圧も斗酒も結構

満月へ向けて飛び立つバットマン

夢窓忌のまためぐりくる京

ナウ揚げれば紅葉便りをまたぐ狎

しやべる家電に返事してをり

卒寿までよくも飽きずに米の飯

日本列島胡沙の降り積む

枝川の花を集めて信濃川

遍路の杖を拭ふ夕暮

連衆 倉本路子 鈴木了齋 五味蓉子

佐古英子

齋 路 英 蓉 同 路 同 齋 英 蓉

齋 路 同 路 同 齋 英 蓉

齋 路 同 路 同 齋 英 蓉

齋 路 同 路 同 齋 英 蓉

齋 路 同 路 同 齋 英 蓉

齋 路 同 路 同 齋 英 蓉

齋 路 同 路 同 齋 英 蓉

齋 路 同 路 同 齋 英 蓉

齋 路 同 路 同 齋 英 蓉

齋 路 同 路 同 齋 英 蓉

齋 路 同 路 同 齋 英 蓉

猫妻会例会作品

平成十九年七月十八日首尾
於 江東区芭蕉記念館

歌仙 「昼の蚊」 上月淳子 捌

昼の蚊にさされもしたり芭蕉堂 淳子
 木木の緑の美しき梅雨晴 郁子
 電子辞書子に諺を教へゐて 千恵子
 ポストへの道遠回りする 庸子
 満月と街灯にわが影ふたつ 了齋
 峯すれすれに渡る雁 郁子
 シベリアの花野を進む騎馬の列 千
 美女も宝も奪ひ取るまで 齋
 十年経て茶漬の味となりし閨 庸
 ぬるくなりゆく朝の湯湯婆 齋
 余震まだ収まらずして月冴ゆる 齋
 憤怒の相を仏師彫り上げ 千
 北鮮は核の一部を止めしとか 庸
 勝ち組負け組戦はぬ組 郁
 新聞は弁当箱を包むため 千
 アラビア文字の書出しは右 齋
 花のもと学者先生酌み交はし 千
 香もほろ苦き若鮎の腸 郁
 ナオストックは兄のお下り春スキー 齋
 セブンイレブン夢は売り切れ 同
 代演の主役で掴む人氣の座 庸
 白血病に克てと遺言 千
 滝しぶきマイナスイオンたつぷりと 千

歌仙 「ワイン買ふ」 豊田好敏 捌

小便小僧藍浴衣着る 庸
 いい年で胸ときめかせ待ち合はず 郁
 元の鞘なり夫婦交換 庸
 裏切りの数だけ女したたかに 同
 慰みに弾く愛のピオロン 郁
 隠れ家のマリア観音照らす月 千
 かすかに影の動く熊架 千
 ナリ 廃線を歩けば背高泡立草 齋
 まだ片言の交じる日本語 齋
 路地裏に三角ベース賑やかに 郁
 じゃんけんぼんで登る階段 齋
 花早き南の島に着任し 淳
 湖をまたぎて懸かる初虹 庸
 連衆 東 郁子 鈴木千恵子 久保田庸子
 鈴木了齋

歌仙 「ワイン買ふ」 豊田好敏 捌

ナリ 皇帝は地図にまつすぐ線を引き 枝
 水海やがて融けてゆく危機 同
 鎌いたち膝ざつくりと割れて月 同
 旅の土産に土地のラーメン 恭
 マークンのおかげで楽天四位五位 同
 老監督はほくそ笑みたる 同
 ひとひらも散らす風なし花の刻 良
 目の覚めるやう三つ葉芹汁 同
 ナリ 峠道は乗込鮎で賑はひて 枝
 窓辺逢かにジント聞こゆる 同
 市役所にすぐやる課などありません 同
 絆創膏で落ちた大臣 同
 夏休み終る頃には痩せなさい 同
 浴衣の帯をくるり引っぱる 同
 抱かれたる夢が醒めたら猫でした 同
 クレオパトラのやうなマスカラ 同
 株券も権利書も仏壇の奥 同
 庭の片隅藪じらみ揺れ 同
 波音に誘はれ指呼に月登る 同
 胡弓の調べ雨の盆憂し 同
 ナリ 急行も停まらぬ駅の時刻表 同
 右往左往の映画ロケ隊 同
 紋所出せば平伏する庶民 同
 桶の浅瀬の潮を吹く音 同
 花万朶ゆるり流るる隅田川 同
 春の霰を手のひらに受く 同
 連衆 本屋良子 遠藤央子 式田恭子
 西田一枝

歌仙 「花芭蕉」 武井雅子 捌

花芭蕉庵は雨に静もれる 雅子
 門くぐり来る上布綴羽織 千町
 研修会エリート幹部集まりて 碧
 ふつくらとしたスフレ差し入れ 志世子
 山頂の月笑ふかに耀へり 吉文
 草叢に澄む鈴虫の声 世
 休暇明け教室に風の又三郎 町
 転校生にやさしまドンナ 碧
 ツーリングナンバのハーレーダビットソン 町
 茶道華道に励むこの頃 世
 両の手に懐石ご膳持ち重る 吉
 つぐらに入のお利口な猫 世
 蒼き月照して湖の御神渡り 町
 歌舞伎好評ニューヨークパリ 碧
 歌舞伎の千の眼につつかれる 世
 週に一度の朗読の会 吉
 同じ形くり返さざる飛花落花 碧
 反芻しつつ耕牛のゆく 吉
 ナオ釣り上げし柳もろこを塩焼きに 世
 ずしり手応へ悪の報酬 町
 よろよるとニトロを運ぶおんぼろ車 碧
 余震の不安身の内に棲む 吉
 楽園の蛇がわたしを惑はした 町
 素肌同士が汗ではりつく 同
 ダッコちゃん皆が持ってた昭和あり 同
 メタボ耳しひ増える高層 碧

強面で鳴らすやくざの泣き上戸 町
 お稲荷様に供ふあぶらげ 碧
 母許にはらから集ふ月今宵 世
 三部合唱ハモる清秋 同
 ナウイチローの後ろ歩きのさはやかに 碧
 すり寄つて来るおねだりの犬 町
 砲声のとよもす国の遙かあり 同
 選挙間近に遊説の友 吉
 見上ぐれば九輪水煙花の霊 雅
 まほろばの径満つる囀 碧
 連衆 原田千町 松本 碧 秋山志世子
 永田吉文

歌仙 「睡蓮の」 松島アンス 捌

睡蓮の浮葉に力漲れり アンズ
 ゆらり緋鯉のつくる水の輪 路子
 博物館縄文弥生巡りあて 士郎
 靴紐直す隅の丸椅子 泉子
 開かれしままのノートに後の月 常義
 夜食仲間は同じ顔ぶれ 同
 列卒の追ふ鹿に向き合ふ尾根の道 士
 妬心の牙を磨きつつ行く 路
 窯変の炎に封じ込めた恋 泉
 カノンの歌のこだま幾度も 同
 聖堂の床には王の名もありて 義
 片方ばかり失くす手袋 泉

時雨過ぎ月清む町の広く見ゆ 士
 漢字難し単線の駅 路
 トテ馬車の御者の賑る鞭弧を描き 同
 活断層と知らず住みをり 士
 著作権なんて言はない花の精 泉
 朝寝のいびき肘で小突かれ 義
 ナオ雀蜂の空巢の雀写メールに 路
 尖閣・竹島乗っ取るが勝 士
 原材料心配される輸入品 ア
 爺の折鶴少しアバウト 路
 暑氣中り癒えて一気の大ジョッキ 士
 松原遠く沖に白い帆 義
 少年の高音震ふのどぼとけ 泉
 チョコのかはりにキッスあげやう 義
 ショーファーはダンナの秘密他言せず 泉
 鹿鳴館の往時茫茫 路
 星今宵逢瀬羨む天の月 同
 菊人形に手招きをされ 士
 ナリ赤い羽根いくたびも買ふ旅半ば 義
 弓道場に奔る矢の音 士
 ひとりずつ縄跳びの輪を抜け出して 路
 IT化する自分史の稿 泉
 十一面観音像は花の中 ア
 摘草の香の残るエプロン 義

連衆 倉本路子 横井士郎 青木泉子
 生田日常義

歌仙 「脳のシナプス」 横山わこ 捌

戻り梅雨脳のシナプス一休み わこ
 きざみ胡瓜にたつぷりと塩 久美子
 植木屋の鉄の音の響ききて 要子
 幼児を乗せ過ぎる自転車 霞
 湯の里の端山に望の月上り 政志
 美術の秋を告げるポスター 霞
 さはやかに新横綱の四股高く 久
 ぐうんと伸ばす金の孫の手 要
 お嬢さまお気の召すまま遊びましょ 久
 ずばり言ふわよあのひとはだめ 志
 ラテン系アングロサクソングelman人 久
 混声合唱うまくハモって 要
 外套の身にずっしりと月の道 霞
 見とれて寒し琅玕の沼 志
 李太白皇帝さまに用ひられ 久
 まはる盃飲んだふりして 霞
 気負ひなく生きよとの文花おぼろ 要
 苗代蛙けるけろと鳴く 同
 ナオ初虹の二重を潜る高速度 久
 女性候補のアジもしつこく 志
 美しい国とは何処のことかしら 久
 梵鐘低く地の底を這ふ 要
 鳥柄杓突然庭に生え出して 久
 シツカロールに噎せる縁側 わ
 可笑かり真面目すぎたるプロポーズ 久
 嗅ぎたきものかあの肌襦袢 志

探知犬思はぬものを探し当て

弥生時代がまた甦る

月の窓青磁の艶に惚れ惚れと

新薬積んでバイク出発

ナリ強行軍ツアー身に沁む老の旅

もてあましたる大き飴玉

読み耽けて携帯小説刻流る

百葉箱の気温測定

花の庭団塊世代のエコ暮し

乗込鮎の姿ひたむき

連衆 副島久美子 山本要子 高塚 霞

峯田政志

佐藤良彌氏追悼二十韻

於 樫が谷房蓮庵

「逝きて風ある」

内田麻子 捌

男ひとり逝きて風ある六月尽 麻子
 庭にびっしり蕨菜の白 弘子
 ケータイを開けばメールきりもなし 蓉子
 合唱隊のハモリいろいろ 碧
 爪先の小石蹴る子等望の夜 美保
 珍しき虫図鑑調べる 文子
 億シヨンの三十五階吊し柿 蓉
 一緒に食べよ私行くから 碧
 妻の座は要らないけれど傍にゐて 弘
 除暗遍照寺の碑 保
 ナオいい加減はびこる世に生き酒苦き 文
 狐の襟巻今流行らない 麻

鶴の月グリムの国へ旅仲間

お菓子家で聴く子守唄

少女から女へ移る時がある

キューピッドの矢正に命中

ナリアンケート記入欄なき年代に

薄氷解けし湖のさざ波

撮影会富士背景に写す花

故郷訛り今日もうららか

佐藤良彌氏は猫養の連衆として、一座した

事も有りますが、同じグループの五味さんか

ら、色々消息を伺う事が少かったと思います。

「点」十八号と御見舞の手紙を差し上げたの

も、調子を崩して居られると聞いたからでし

たが、ワープロによる俳諧味あふれる返書を

いただき、二十枚位写真が同封されて居りま

した。私に捌いてと云うことなので、哲さん

などにも御送りしました。手紙の中に「月に

十日位パチンコをします。是は実利的でけふ

五万勝って今年三二万の勝ちになってます。」

など強がりの部分もあって、この手紙の消印

が三月四日それから四ヶ月、訃報を又蓉子さ

んから伺い、諸行無常の感に浸って居ります

しかし、連句の世界に足を踏み入れて、お互

いに分り合い、心を寄せ合った事は何よりの

事であったと思います。

平成十九年七月十二日

内田麻子

事務局便り

◇人賞おめでとうございます。
第十九回全国連句新庄大会
優秀賞

倉本路子 「花栲」
佐々木有子 「真白きノート」
登坂かりん 「新庄ばやし」
川名将義 「雪催」

◇猫養発展基金にご協力有難うございます。

山崎 一恵様 三万円
諏訪 欣二様 八千円
基金口座 みずほ銀行 新宿新都心支店
猫養基金 普通3376045

◇平成二十年猫養会初懐紙

日 平成二十年一月二十日(日曜日)
時 十二時より十七時(受付十一時半)
場所 ホテルフロラシオン青山
(地下鉄表参道駅徒歩五分)

案内状に地図添付予定)

電話03-3403-1555
港区南青山四十七-五八

◇猫養作品集第十七号原稿募集

○応募用紙 B4判指定原稿用紙
ワープロによる原稿はB4サイズに拡大
のこと

○形式 自由 一人一巻

但し原則として歌仙までの長さとする。

○猫養会員の捌き作品 平成十九年の作品

○作品は、最初に捌きと一巡の作者名を
フルネームで書いて下さい。

自他場、季、通し番号は記入しないこと。

○新かな・旧かなの別を明記して下さい。

○締切 平成十九年十一月末日

○送り先

鈴木千恵子

〒202-0012

西東京市東町四-四-二八

☎0424-23-7817

○発行予定 平成二十年三月

◇新入会員紹介

武井敦子 入間市在住

野口明子 板橋区在住

竹村照代 茅野市在住

◇名簿の訂正

永田吉文

電話042-722-3809

◇「連句入門」第九版 受付中

ご希望の方は島村曉巳まで

☎045-629-5025

◇ホームページ完成のお知らせ

前号でお知らせしました改装中のねこみの
ホームページの工事が完成致しました。新ア
ドレスを末尾に掲載致しますのでぜひご活用
下さい。また、ご利用頂いた上でのご意見、
ご感想を頂戴し、今後の改善の資と致したく
宜しくお願い致します。なお、「連句実作の
場」ならびにリンク欄はお申し出があれば追
加致しますのでお聞かせ下さい。

会員以外の方にもご喧伝下されば幸いです。
新アドレスなどは以下の通りです。

<http://nekomino.cool.ne.jp/>

会員のページへのパスワード meiga

HPチーム 島村曉巳 横井士郎

季刊 『猫養通信』第六十九号

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二二-二十一-十六

編集人 猫養通信編集部